

# 玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 62 回

## 同時代から見た頭山満 ⑥

―書と人物―

「新濁日報論説編集委員の森沢真理さんが『地方紙と戦争―新濁日報第二代社長「坂口献吉日記」に見る」写真①を上げました(二〇一四年十月十五日、新濁日報事業社)。十月十五日は新聞週間の初日で、日本新聞協会主催の第六七回新聞大会が新濁で開催されました。それに合わせて『地方紙と戦争』が刊行されました。

頭山満、新濁と交流/流れ組む右翼結社・北溟社」という記事を書いています。この記事の取材を受けたことで私は頭山満と新濁との深い縁を知りました。以下は森沢さんに教えられたことを中心に書いていきます。

『地方紙と戦争』には本文中で「中野正剛、新濁へ自刃選んだ政界の猛虎」、コラムで「玄洋社と新濁頭山満の流れ組む『北溟社』が、新聞連載から収録されています。昭和七年(一九三二)四月、中野正剛が新濁に遊説した折、坂口献吉は東京上野で正剛を見送ったということです。

さて、頭山満と新濁の関係です。「戦前から戦後にかけて、新潟市に『北溟社』という右翼結社」があり、「頭山満の流れを組み、加藤大輔は頭山の門下生で、昭和四年に北溟社を結成、新潟市での結成集会には頭山男・加藤大・二氏が頭山書北溟社」の額写真②を所蔵しています。とても力強く端正な書です。北溟は北の海の意で、北陸や北海道に使われています。玄界灘を紫溟(筑紫)九州あるいは筑前(の海)とか玄洋と表現することを考えると、北溟は新潟付近の日本海を

呼んでいるのでしょうか。なお新濁日報社長高橋道映氏も頭山の書「明大義」(大義を明らかにす)写真③を所蔵しておられます。お父上から受け継がれたものということです。

「明大義」はおそらく水戸藩の学者藤田東湖が幽閉中に著した『回天詩史』に由来します。その一節に「苟明大義正人心 皇道奚患不興起」があります。「苟も大義を明らかにして人心を正せば 皇道奚ぞ興起せざるを患えん」です。

次に長岡市には頭山書の記念碑「竹介先生出生之地」写真④があります(長岡市杉之森、写真は森沢さん提供)。「出」は山を二つ重ねて書いています。竹介は高橋竹之介(一八四二―一九〇九)竹之助とも書きます。頭山よりも一三歳年長です。尊王攘夷派の志士で、私塾・誠意塾を開いていました。頭山は明治十三年(一八八〇)、民権運動で東北・北陸を遊説したことがあり、高橋家には二か月近く滞在しました。「頭山満書」の文字の下に、姓名印(白文「頭山満」・雅号印(朱文「立雲」)写真⑤)までが忠実に彫り込まれています。白文は陽刻、朱文は陰刻です。

前号で紹介した「行義達道」額(新潟県新発田市長徳寺「義士堂」)写真⑥は文字部分が読みにくかったので再掲しました。

※森沢真理様、加藤大二様、高橋道映様に感謝します。



写真④



写真⑤



写真①

安吾兄弟の父が仁一郎(新潟新報社長)。仁一郎は平岡浩太郎経営の九州日報で、社長兼主筆



写真②



写真③

竹介先生出生之地



写真⑥